

(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第50集)

白川金色院跡発掘調査概報

—平成12年度—

2001

宇治市教育委員会

例 言

1. 本書は、宇治市教育委員会が平成12年度に国庫補助事業として実施した白川金色院跡発掘調査の概報である。
2. 本発掘調査の経費は総額6,500,000円で、国から国宝重要文化財等保存整備費補助金としてその50%を、京都府から文化財緊急保存費補助金として25%の補助を得た。
3. 本発掘調査は、平成12年11月7日に開始し平成13年3月16日に終了した。発掘面積は、300㎡である。
4. 本発掘調査は下記の体制で実施した。

発掘調査責任者：宇治市教育委員会 教育長 谷口道夫

調査専門委員会：〔委員長〕 狩野 久（京都橘女子大学）

〔副委員長〕 中川恵次（宇治市文化財保護委員長）

〔委員〕 上原真人（京都大学）・仲 隆裕（京都芸術短期大学）

西山良平（京都大学）・山岸常人（京都大学）

発掘調査担当者：宇治市歴史資料館 文化財保護係 主 事 浜中邦弘・嘱 託 吹田直子

発掘調査事務局：宇治市歴史資料館

発掘調査参加者：小谷紗代・吉田椋善・山中 繁・久保千恵子・志村みどり・畑 陽子・足立千春・西田倫子・山下 睦・黄 基玉

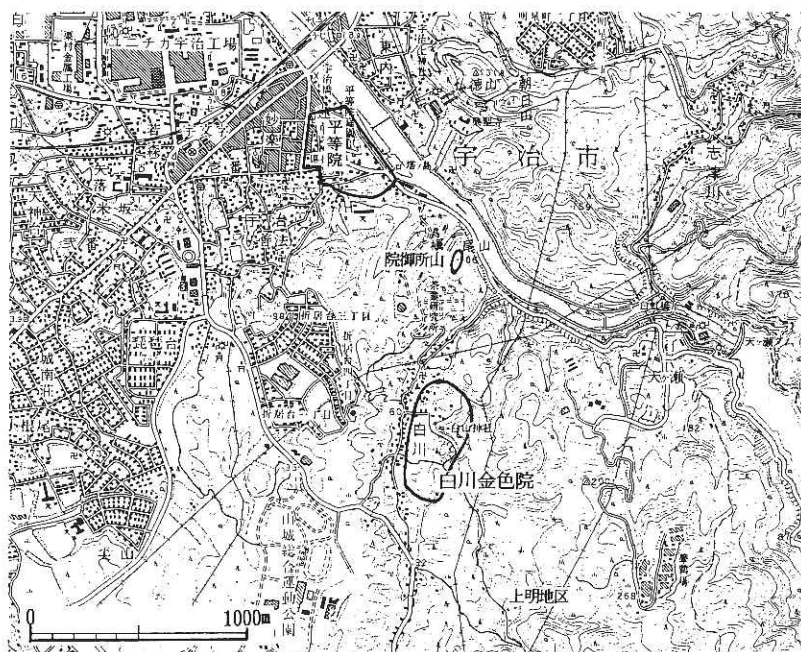
5. 実施にあたっては下記の方々よりご協力・ご指導賜った。記して感謝したい。（順不同・敬称略）

文化庁記念物課、京都府教育委員会文化財保護課、京都府立山城郷土資料館、坂井秀弥（文化庁記念物課）、山口 博（京都府教育委員会文化財保護課）、白川区、服部正吉、服部明信、古川 要、古川三郎、中村重和、北村晶子、北村彦治、辻喜代一、松村英之（勝山市教育委員会）

6. 本発掘調査の関係資料及び出土品は宇治市歴史資料館が保管している。

7. 本書の編集は宇治市歴史資料館が行い、実務を浜中邦弘が担当した。執筆の分担は下記のとおりである。

浜中邦弘 I・II・III・IV・VI・付載-A
西田倫子（京都橘女子大学学生） V
小谷紗代（同志社大学学生） 付載-B



◀白川金色院の位置

序

白川金色院跡は、平等院の山一つ南の美しい白川の谷里に残る遺跡で、平安時代後期にあたる康和4年(1102)に、関白太政大臣藤原頼通の娘であり、後冷泉皇后であった藤原寛子が建立したと伝える寺跡です。記録によれば、その本堂は文殊菩薩を安置した金色に輝く大きな仏殿であったといい、その他にも多くの坊舎が建立されていました。

現在、白川区には、この白川金色院に関係する重要文化財指定の仏像あるいは鎮守社である白山神社、また惣門などが残され、往時の幾許かを偲ぶことができます。しかし平安王朝期に花開いた栄華の実像は、永い時の経つ中で白川の自然の中に埋もれ、この谷里の風景として息づくこととなりました。

白川金色院跡の往時の姿を解明しようと、私ども教育委員会が文化庁・京都府教育委員会そして地元白川区の皆様のご協力の中で発掘調査を開始したのは平成5年度のことでした。以来、今年度で8年目を迎えます。平成5年度から5年間の調査は、内容確認を主とするもので、平安期の仏堂跡の発見や貴族の生活を彷彿とさせる豪華な経塚出土品、あるいは絵巻物から飛び出してきたような室町時代の坊院跡の発掘などから、この遺跡の歴史的重要性あるいは文化財的価値の高さを窺うことができました。そして今年度の発掘調査では、本書にその概要を示すとおり、寺域の北限及び南限を概ねながら確定するにいたりました。

白川金色院跡は、世界遺産であり国宝の平等院や宇治上神社と同じく、平安時代の宇治を代表する重要な遺跡です。教育委員会といたしましては、今までの発掘調査成果を踏まえ、更に実態解明の発掘を継続しつつ、この遺跡の保存と活用について検討を進めてゆきたいと考えています。

末筆になりましたが、発掘調査を実施するにあたりご指導いただいた関係機関・各位またご協力いただいた地元白川区の皆様にご心よりお礼申し上げます。

平成13年3月

宇治市教育委員会
教育長 谷口道夫

I. はじめに

白川金色院は、平安時代後期の康和4年(1102)に藤原頼通の娘四條宮寛子によって創建されたと伝承される寺で、現在は明治期の廃仏毀釈によって法灯が途絶え、廃寺となり遺跡として今に伝えられている。寺跡は白山神社・惣門・古絵図等から白川宮の前・宮の後・娑婆山を中心寺域として展開し、周囲の山々には数多くの伝承・逸話等が存在することから白川盆地一帯に寺の関連施設が存在していたと想定される。これまでに近代以降の開発を受けていないことから現地形にこれまで培われてきた白川金色院の歴史の蓄積を読み取ることができる。しかしながら、長期間にわたって存続してきた寺であるため、各時代の遺構が重複し合い、時代ごとの風景を復元するには文献史料もほとんどない中において、発掘によるデータの蓄積がなければ極めて難しい状況である。

白川金色院の今年度の調査目的は、寺の北限・南限を確定しようとするもので、土地所有者である古川要氏・中村重和氏・古川三郎氏・服部明信氏・北村晶子氏・北村彦治氏・辻喜代一氏のご協力を得て、白川川下14番地の1、川上り谷78番地の1、宮の後15番地の1、鍋倉山3番地、植田15番地・17番地の1・19番地の2・18番地で発掘を実施することとした。



第1図 白川金色院跡遠景(北西から)

II. 遺跡の環境

A. 位置と地形

宇治市白川は、平等院の南南東約1.5km、平等院の東に連なる標高100m程の丘陵を越えたところに位置する南北に細長い小盆地である。黒川道祐著の山城国地誌『雍州府誌』（貞享元年〔1684〕開板）には、白川は「山水幽水の地にて誠に小桃源と謂うべし」と評されるように江戸時代には幽閑静寂な地として認識されていた。

この白川谷は、長さ南北約1km、谷幅東西200～400m、谷底の標高は海拔50m程、周囲の山丘は標高100m程である。山懐に抱かれた白川谷の西寄りを「白川」が北流し、現在は暗渠化し、谷を通る主要道路となっている。この「白川」を境に東西それぞれで大きく地形の状況が異なっている。西側は急峻な山丘がひかえ、「白川」沿いに平地部がわずかであるのに対し、東側では緩斜面が発達し、台地状となって広がっている。現在は水田や茶畑等の耕地として利用されている。寺跡はこの部分に展開するものと考えられる。この白川谷の北端の宇治川との接点部左岸に槇ノ尾山があるが、江戸時代の文献史料には別名「院御所山」と呼ばれ、寛子の別荘があったところとされている。地元では白山神社の故地であるという。頂部には土塁状の高まりが巡っており、金色院関係の遺構の可能性が指摘される。

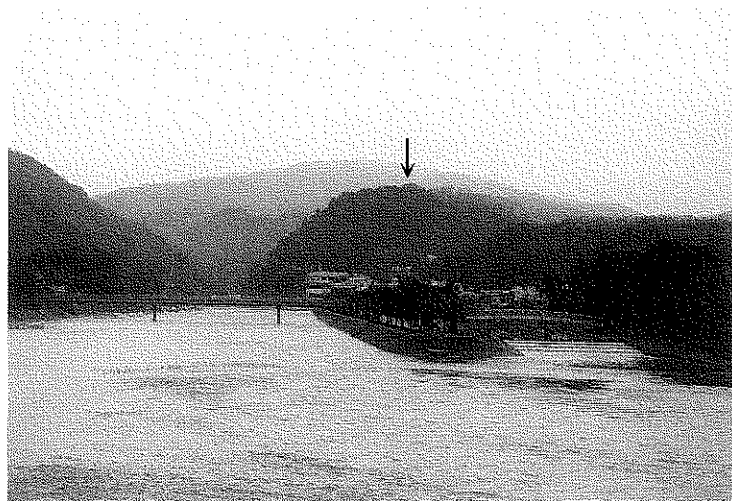
B. 沿革

ここでは文献史料に基づく白川金色院の歴史の変遷について述べていく。

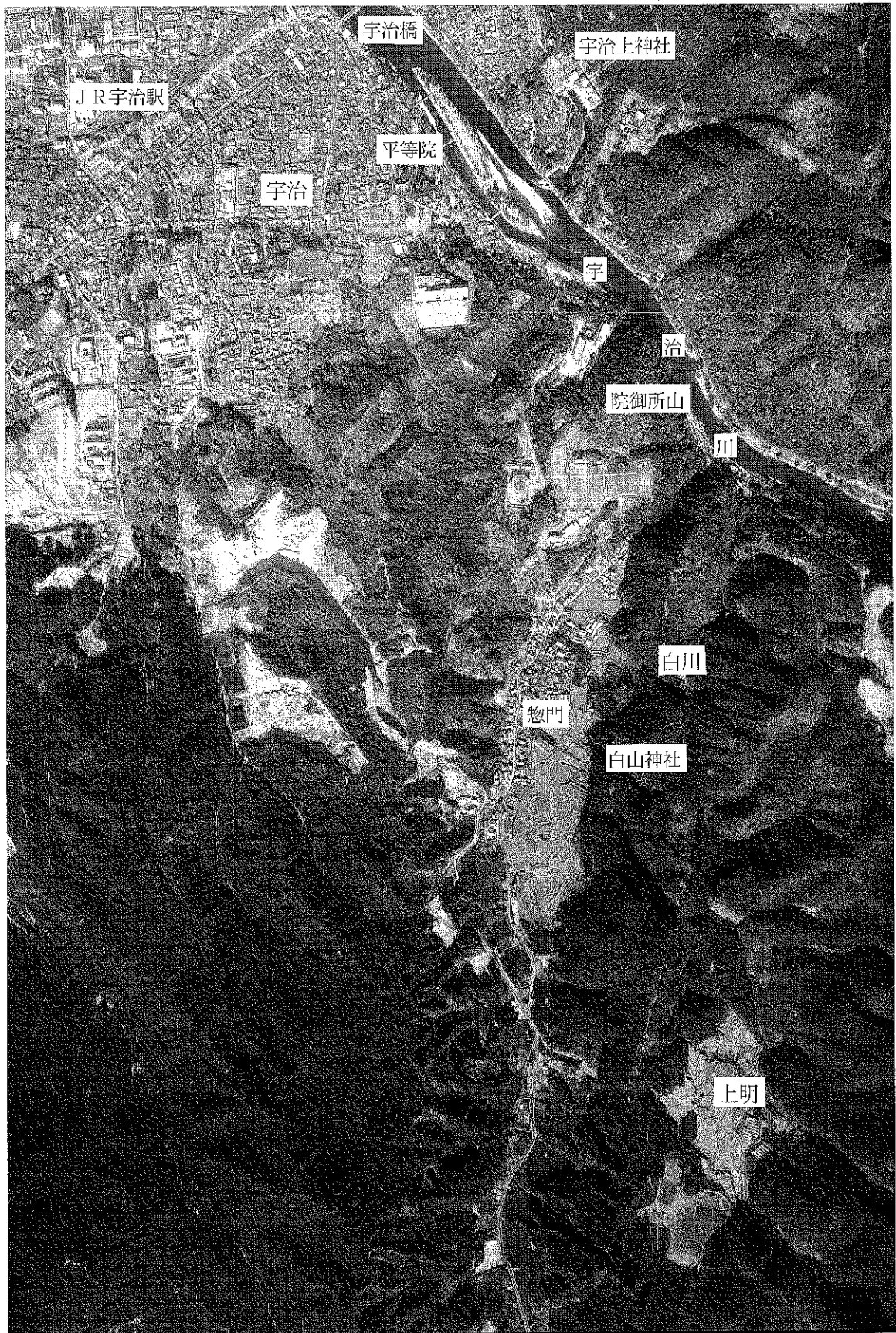
白川金色院は、平安時代後期の康和四年（1102）に関白藤原頼通の娘にあたる四條宮寛子によって創建されたとされる。これは室町時代中期の寛正四年（1463）の『白川別所金色院勸進状』に記された内容であり、それ以前の文献史料には寛子創建に関わる記録は今のところない。

嘉吉元年（1441）頃の成立とされる『興福寺官務牒疎』によれば、白川金色院は、加賀白山を開いた高僧越智泰澄上人と昭澄上人によって養老4年（720）に開基、四條宮寛子によって中興されたと伝える。

この白川金色院に関する確実な史料で現在最古のものは、石



第2図 宇治橋からみた院御所山



第3図 白川付近上空写真（昭和46年）

山寺が所蔵する写経の奥書である。計7巻あり、意聖房・成熟房・文教房が、「宇治白河別所」「白河別所」で書写したと記す。仁平四年（1154）から永暦二年（1161）までの間である。12世紀中頃には、「別所」と呼称された寺院であったようである。また当該期で注目すべき史料が『兵範記』の仁平三年（1153）四月十五日条である。宇治離宮祭に奉仕する宇治白川等座々法師原60余人が藤原忠実から田楽装束を下賜された内容である。離宮祭は離宮社の祭礼で、藤原忠実の援助によって大いに賑わっていたことが諸記録から窺える。この『兵範記』の仁平三年条は、当時、田楽衆が白川にもいたことを示すものであり、寺との関連性も含めて興味深い。

元久元年（1204）十一月二十五日、氏長者である従一位太政大臣九条良経が、平等院とともに白川別所に訪れたことが、九条家の家司を勤めた藤原定家の日記『明月記』にみえる。龍雲寺（宇治田原町所在）所蔵の大般若経奥書には「嘉元三年金色院辻坊書写」と記され、14世紀初頭には確実に金色院という名称が用いられていた。また後に「白川十六坊」と総称される坊の一部がこの頃成立していたことも窺える。

長祿四年（1460）、盗火にあって寺が焼失したと前述の『勸進状』は伝え、この復興のため寛正四年（1463）の勸進状の作成、そして勸進が行われた。応仁元年（1467）、近衛家十三代当主近衛政家は、応仁の乱で騒然とする京都を避けて宇治に一年間疎開し、その際に白川別所に七度も巡見していることが『後法興院記』にみえる。また所々の庭を見物した記載から複数の庭園が存在し、そして寺の復興が順調に行われたことを間接的ながら窺える。

16世紀前半には、連歌師宗長が辻坊に宿泊し、たびたび連歌会を開催したことが『宗長日記』に記されている。復興後、数多くの坊院を有する一大寺院として発展したようだが、江戸時代中頃にはすでに多くの坊が衰退・廃絶したようで、明和三年（1766）の『庄屋・年寄等訴状写』には北之坊・福泉坊・蔵之坊の3坊しかみられなくなる。

幕末にはさらに衰退の一途を辿り、文人茶師上林清泉（1801～1870）作の『白山宮の図』によれば、坊は福泉坊のみで、堂塔では文殊堂・白山神社しか標記されていない。

明治に入り、金色院も廃仏毀釈の嵐の中で消滅、廃寺となった。



第4図 九重石塔とさざんか（宇治名木百選）

Ⅲ. 調 査 経 過

白川金色院跡の計画的発掘調査はこれまでに計7回実施している。平成5年度から内容確認を主目的として平成9年度までの都合5カ年を目途として調査を行った。その成果は後述するように白川金色院跡が遺構・遺物いずれをとっても残りが良く、いかに貴重な遺産であるかを窺えるには十分な成果を挙げることができた。これを第1期5カ年計画とする。平成10年度からは第2期5ケ年計画として平成14年度までを目途に、範囲確認を重点に置いた調査を実施することとなった。今年度はその3年目で、北限そして昨年度に引き続き南限の確定を目的とした調査である。

A. 過去の調査

計画的発掘調査前の昭和55年に一度調査が行われている。古絵図には弁天池・弁天島が描かれたところで、現在の白川区集会所が建設される時に実施されたものである。調査の結果、池の存在とその年代が平安時代後期に溯る可能性が指摘された。そして平成5年度から昨年度までの7次にわたる発掘調査は、白川金色院を様々な視点から分析することのできる成果を挙げることができた。

平成5年度は、明治期の最後まで残っていた福泉坊跡を発掘調査した。福泉坊跡の下層から平等院と同範の平安後期に比定される軒瓦が出土し、そのことから白川金色院が後世の記録が記す平安後期頃に創建されたことが概ね理解されることとなった。

平成6年度は、寺跡中心部からかなり南側に離れた棚田上での調査で、調査の結果、室町中期に再興された坊院の一つが非常に良好な状態で確認され、往時の姿を復元することができた。特に中心の主屋は「主殿造」とも呼ばれる建築様式で、発掘調査では初の実例として注目を浴びた。

平成7年度は、金色院の中心御堂とされる文殊堂跡地の発掘で、大きく2時期（平安・中世）にわたる遺構面が検出された。下層では礎石建物跡が検出された。詳細な規模や時期は不明ながら、平安期に帰属する仏堂跡と理解された。

平成8年度は、昨年度発見の仏堂跡の規模確認の調査を中心に行った。その結果、建物は一間四面の南側に孫庇を有することが判明し、地鎮祭に使用され遺棄されたかわらけの年代観から12世紀初頭頃にこの建物が創建されたことが明らかとなった。創建期に帰属する初めての遺構確認であった。

平成9年度は、計5カ所を発掘した。調査の主な成果は、闕伽井跡と経塚遺構であった。闕伽井跡は、湧出部の山側に滝石組を配していたことが明らかとなった。前面部に広がる平

垣部の実態については、次年度の調査とした。経塚遺構は、踏査時に渥美産の経筒外容器片が採取されたことによって確認調査を実施したもので、経塚本体ともいえる経筒についてはすでに失われていたものの、副納品が良好な状態で確認され、また埋納時の儀式の跡と考えられる焼土壌等が見つかった。12世紀後半頃のものであった。

平成10年度からは、範囲確認を主とした調査に切り替えた。閼伽井跡の前面部と金色院中心域の南側を主に調査実施した。閼伽井跡では予想とは異なり、閼伽井跡の西側に方形の小池跡が見つかり、閼伽井の湧水はこの小池に一旦流れ込み、その後寺川の方へと排水されることが明らかとなった。

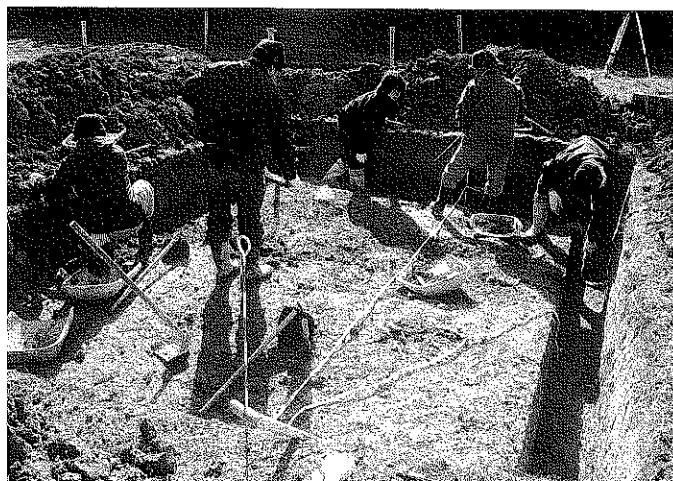
平成11年度の調査は、寺域の南限を確定することを主目的に、従来の調査地点（寺跡中心域）より離れた南側のエリアを重点的に実施した。その結果、遺構は検出されなかったものの、室町期にまで遡る遺物が出土し、また坊跡が想定できる平坦面（茶畑）が付近に存在することから南限についてはさらに南側での調査が必要と判断された。

B. 調査の経過

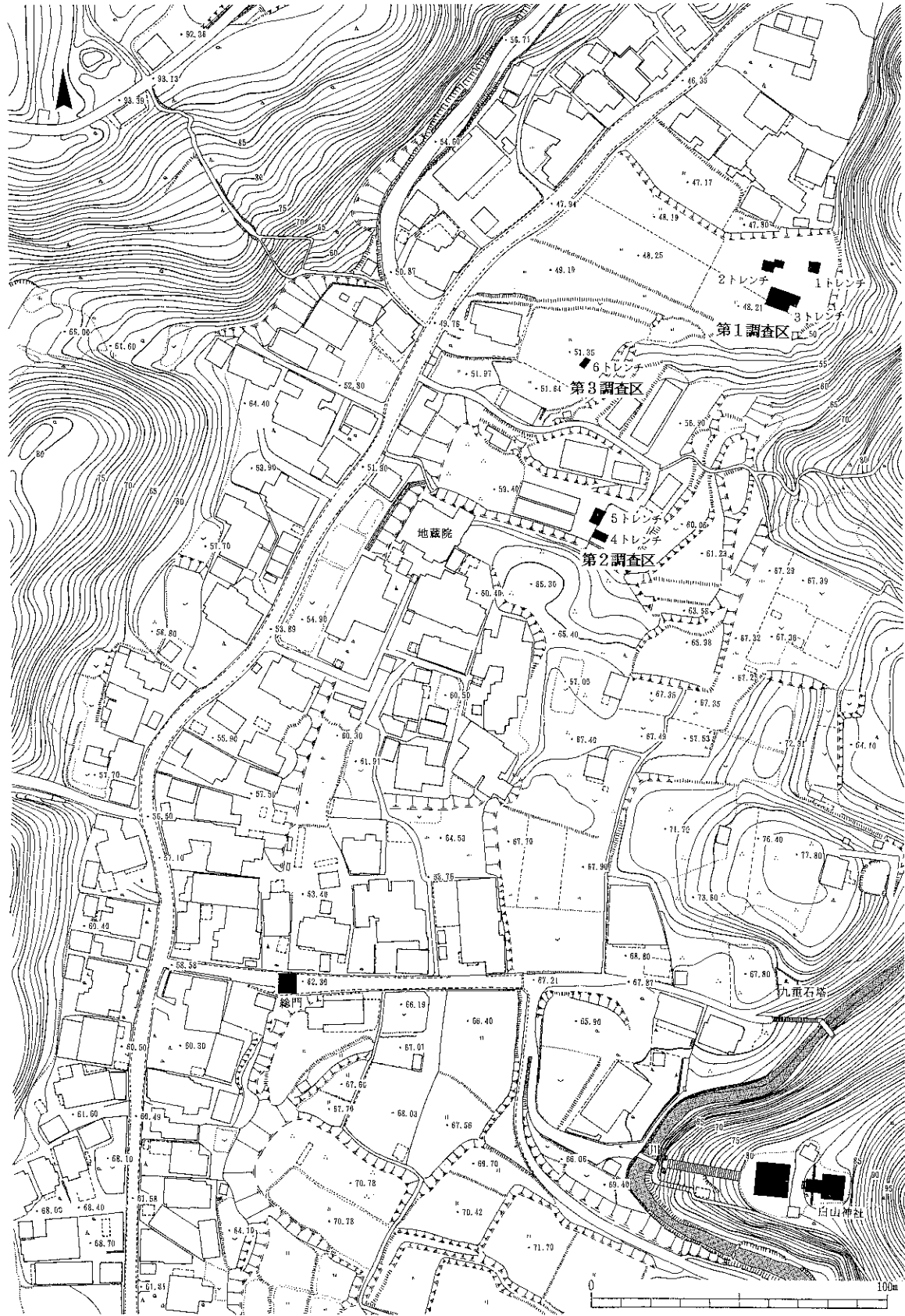
平成10・11年と都合2カ年にわたって南限を確定するための調査を実施してきた。南限は現地形や調査地の確保が困難であること等から確定が最も難かしいと判断していた。今年度は遺構変遷が比較的想定しやすい北部と、昨年度に引き続き南部における遺跡の広がりを確認するための調査を行った。掘削は、調査地の関係上基本的に人力によって行った。北部は、寺跡の中心域から北側を下っていく棚田状の平坦部3カ所（第1～3調査区）を調査実施した。トレンチは比較的調査面積が確保される地域から設定し、順次進めていった。南部は大きく2カ所（第4・5調査区）で調査を実施した。第4調査区では小丘陵の頂部（平坦面）2地点と、以前五輪塔の笠部が表採された地点の計3カ所を中心に調査を行った。トレンチは遺構・遺物の出土状況を見ながら設定することとした。結果的には12カ所のトレンチを設定した。第5調査区は小規模な棚田が広がる地域で、トレンチはその中で比較的広い場所を中心に設定した。結果的に9カ所設定した。

埋め戻しは、実測・写真撮影等の記録撮影を行ったトレンチから、随時行った。

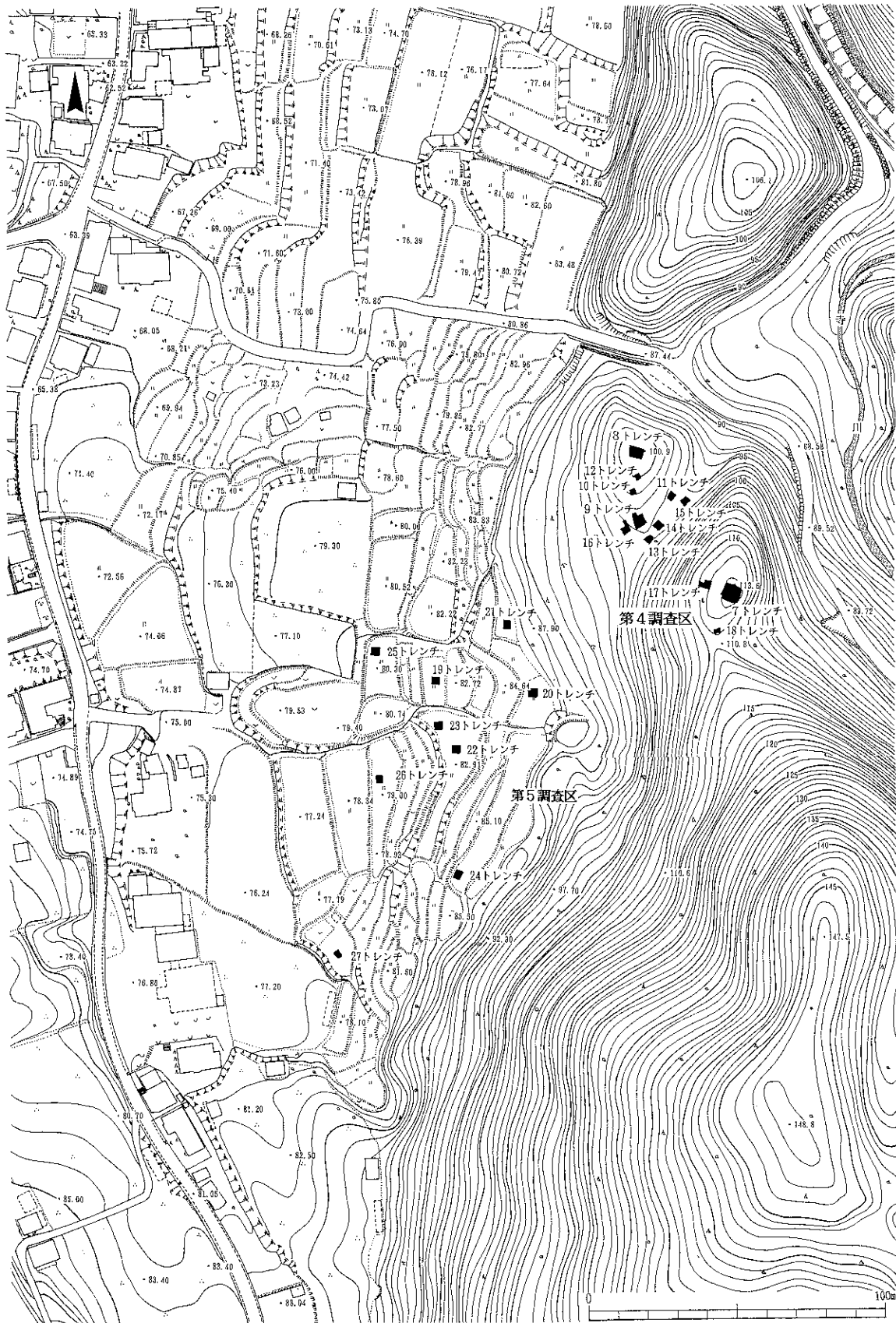
全復旧が完了したのは、3月16日であり、同日に発掘調査を終了した。



第5図 発掘調査作業風景



第6図 調査地（北部）の位置



第7図 調査地（南部）の位置

IV. 検 出 遺 構

今年度の発掘調査の目的は、北限・南限を確定することである。グリッド掘削による遺構確認を主体とした。以下各調査区の成果の概略を述べる。

A. 第1調査区（第6・8～10図）

トレンチは計3カ所設定した。いずれのトレンチも基本的に床土層は薄く、その直下で地山層が確認された。2トレンチでは東西に並ぶ木杭が確認された。この木杭列を境に北側へ急激に落ち込む状況を確認し、時期不明ながら現地形の造成の状況が窺えた。3トレンチでは床土直下で「寛永通寶」が2枚出土した。トレンチ中央で礎石状の石が確認され調査範囲を広げたが、無遺構であった。この調査区の地形は江戸時代に造られ、耕作地として利用されたものと考えられた。

B. 第2調査区（第6・11～13図）

トレンチは2カ所を設定した。現在の平坦面よりもさらに小さな複数の平坦面が確認された。出土遺物から江戸時代に造成されたい。さらに下層から現地形とは逆方向に落ち込む層位が確認され、造成以前には小谷が南北に入り込む地形であったと理解できた。なお、江戸期以降の造成土中から平安後期の向山瓦窯産の軒丸瓦片が出土した。南側に広がる茶畑（金色院中心域）からの混入と想定される。

C. 第3調査区（第7・14～19図）

トレンチは東端部に1カ所設定した。地表面下約1m程で黒灰色土層（腐植堆積層）が表われ、かつては湿地状であったことが窺えた。その上層では中世期の遺物が包含され、大幅な造成が中世期にあった可能性が考えられた。下層の黒灰色土層は園池に堆積した土層の可能性も考えられる。

D. 第4調査区（第8・20～34図）

トレンチは計12カ所設定した。丘陵頂部（7・8トレンチ）は無遺構・遺物であったが、いずれも平坦で比較的広く、またこの付近を地元では「シンヤマ（神司山）」と呼び、その名称の由来等を考えると社が存在していた可能性も考慮される。五輪塔片の採集地点では、土器類が少量ながら出土した。遺構は小ピット1つのみで、墓地を想定するまでには至らなかった。

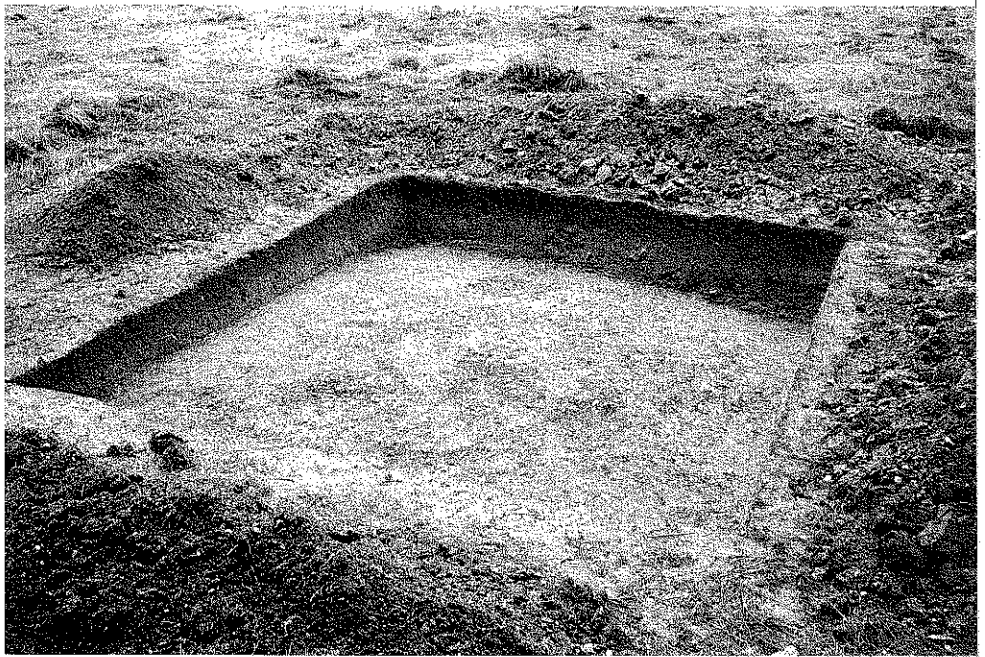
E. 第5調査区（第8・35～37図）

白川谷の南端部である。大小の棚田（現在は休耕田）が数多く展開する。トレンチはその中で比較的大きな平坦面を中心に計9カ所設定した。いずれも雛段造成で下段へいくに従い大規模造成である状況が窺えた。遺物の大半は床土内から出土し、14～15世紀を中心とするものであった。無遺構で、平坦面は耕作地として中世に開削されたと理解された。

第8図 第1調査区の風景
(S→N)

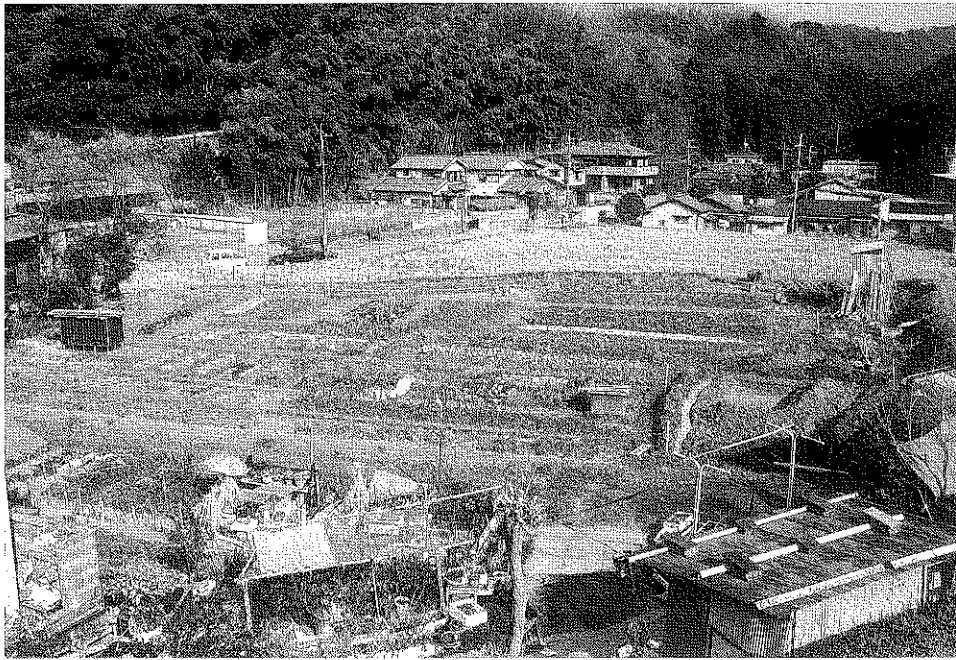


第9図 1 トレンチ全景
(NE→SW)



第10図 3 トレンチ全景
(NW→SE)





第11図 第2調査区の風景
(S→N)



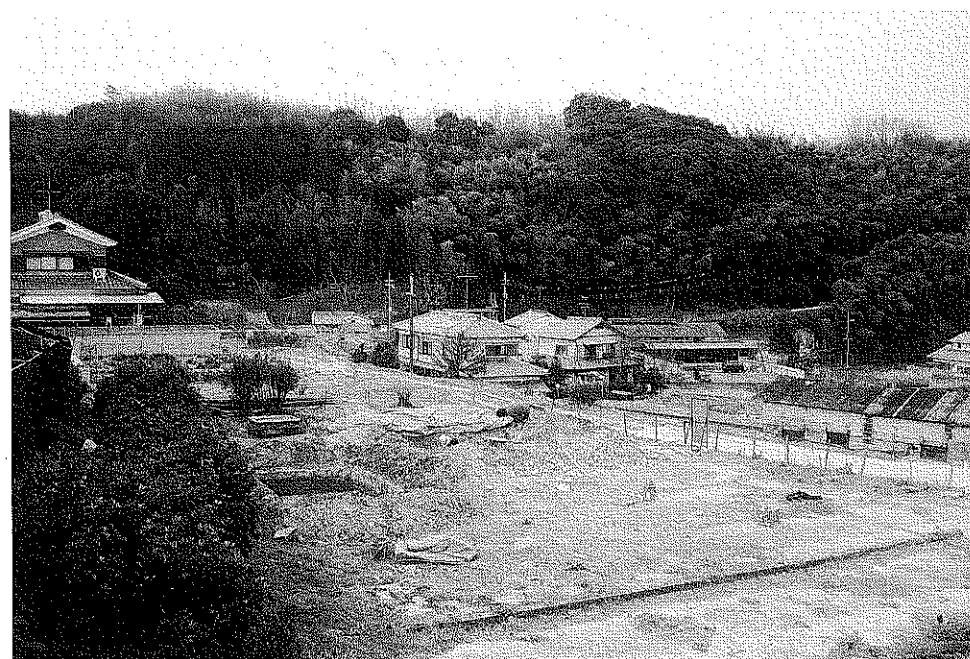
第12図 4トレンチ全景
(S→N)



第13図 4トレンチ北側断割(下層)
の状況(W→E)



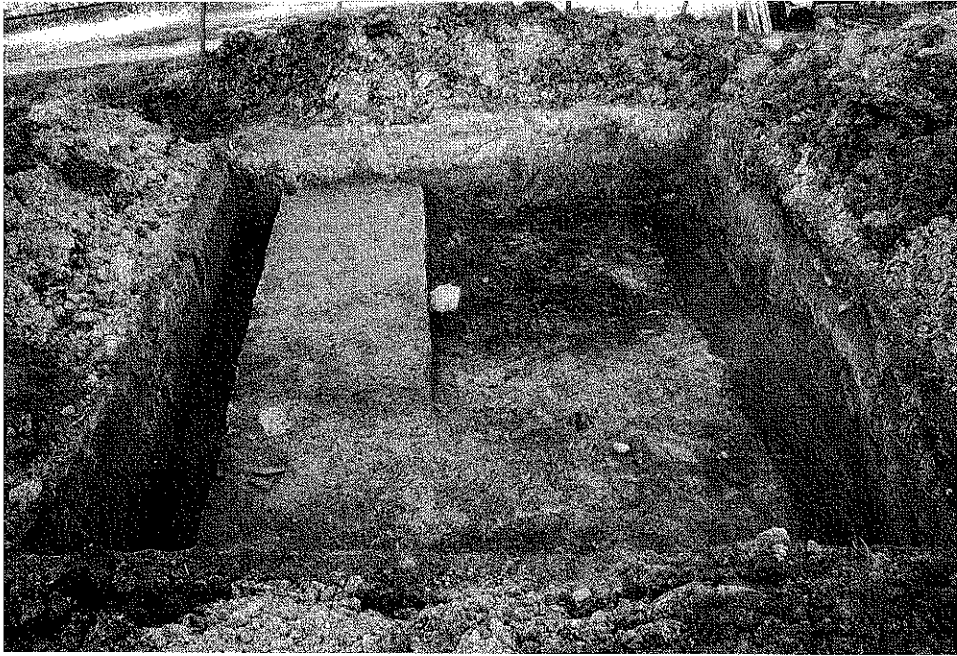
第14図 第3調査区の風景
(NE→SW)



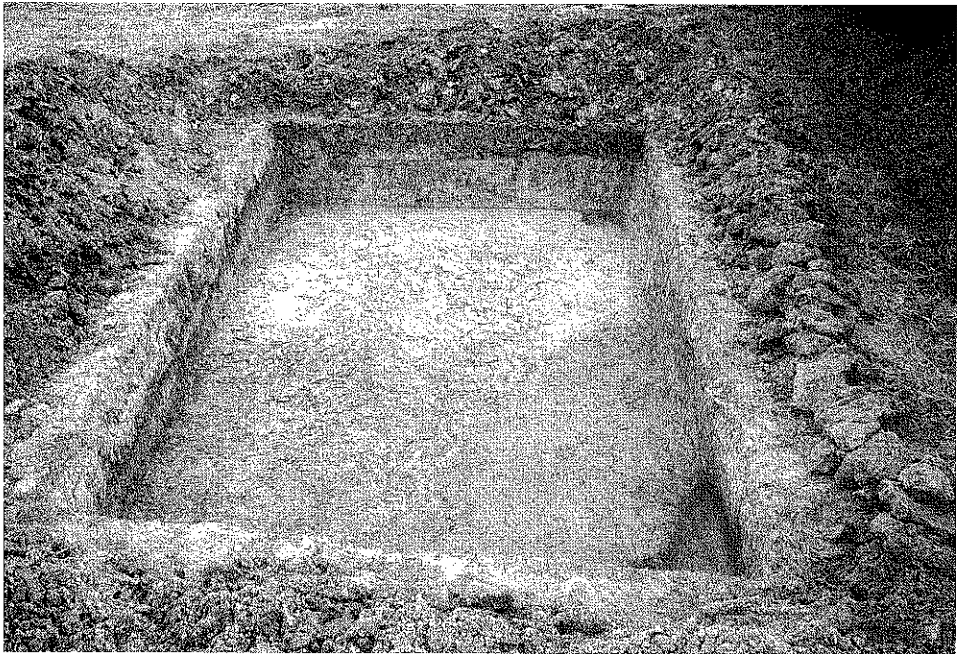
第15図 第3調査区平坦面の
広がり(SE→NW)



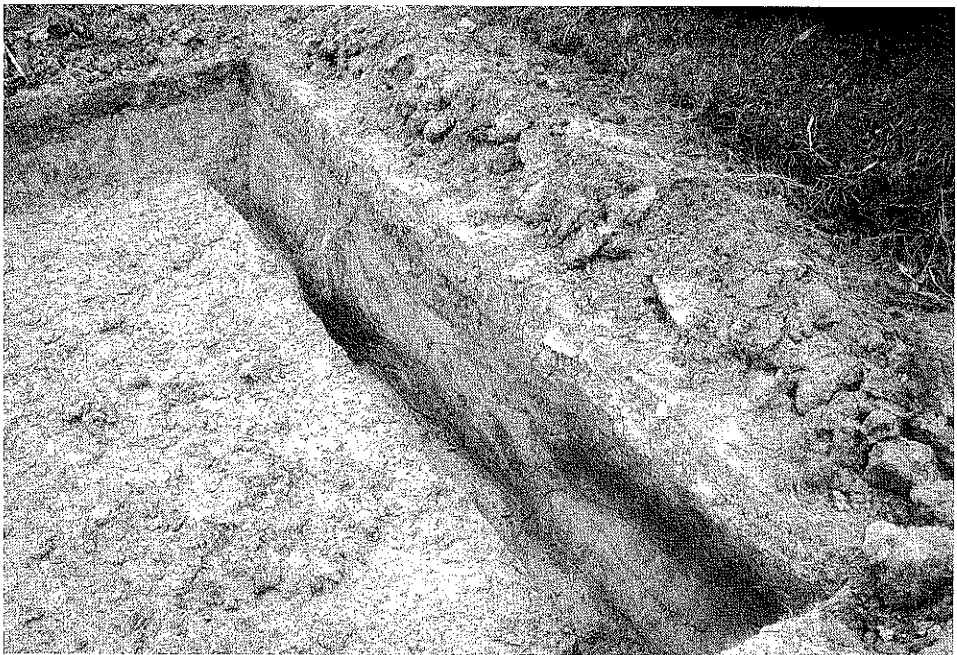
第16図 5トレンチ全景
(NW→SE)



第17図 5 トレンチ全景
(S→N)

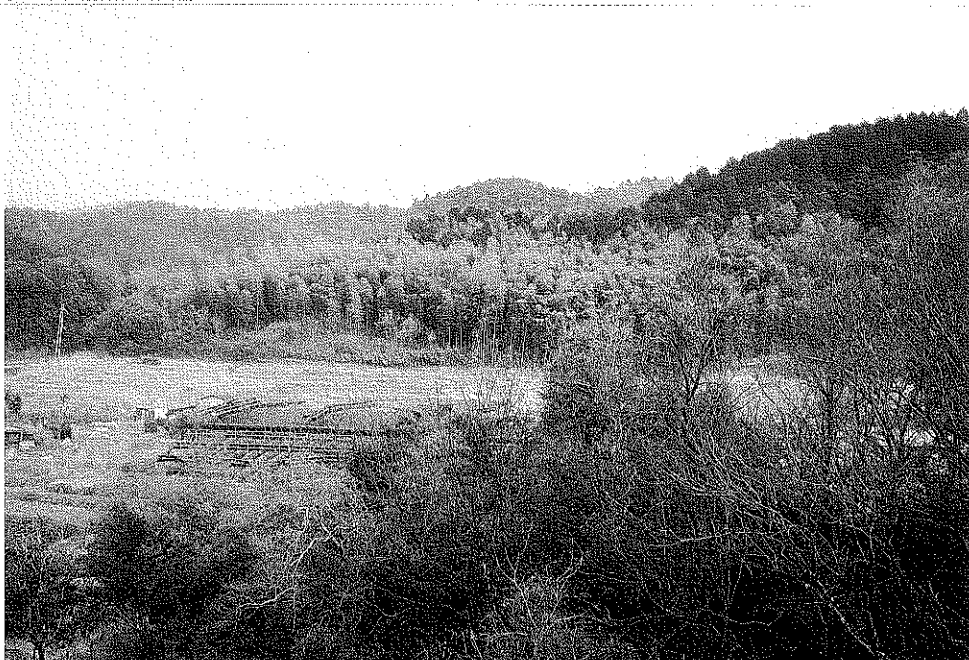


第18図 4 トレンチ全景
(W→E)



第19図 4 トレンチ南側断割 (下層)
の状況 (NW→SE)

第20図 第4調査区(シンシヤマ)
の風景 (W→E)



第21図 7トレンチ西側全景
(NE→SW)

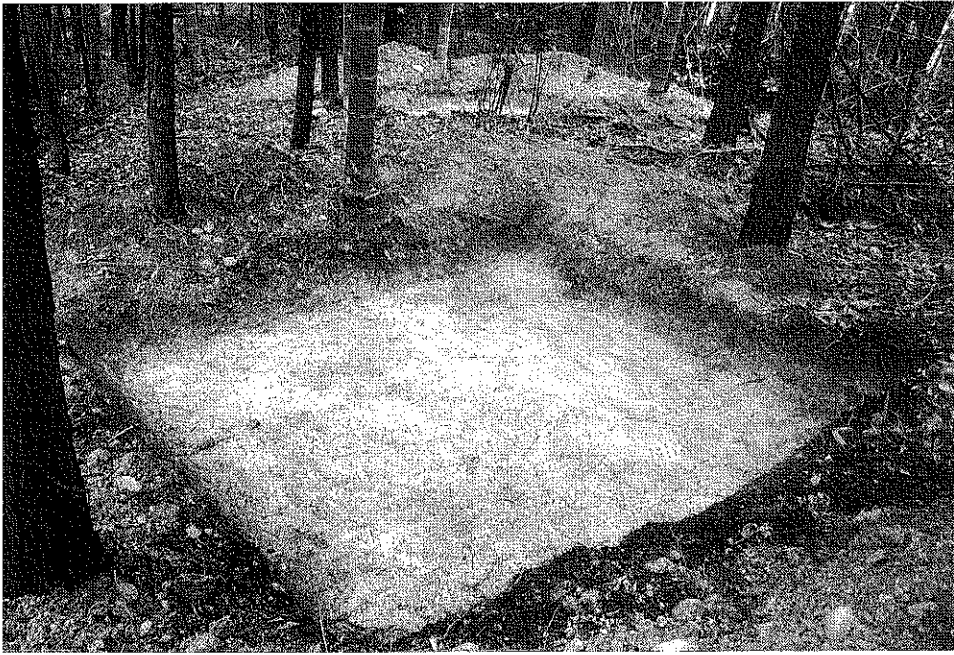


第22図 7トレンチ東側全景
(E→W)

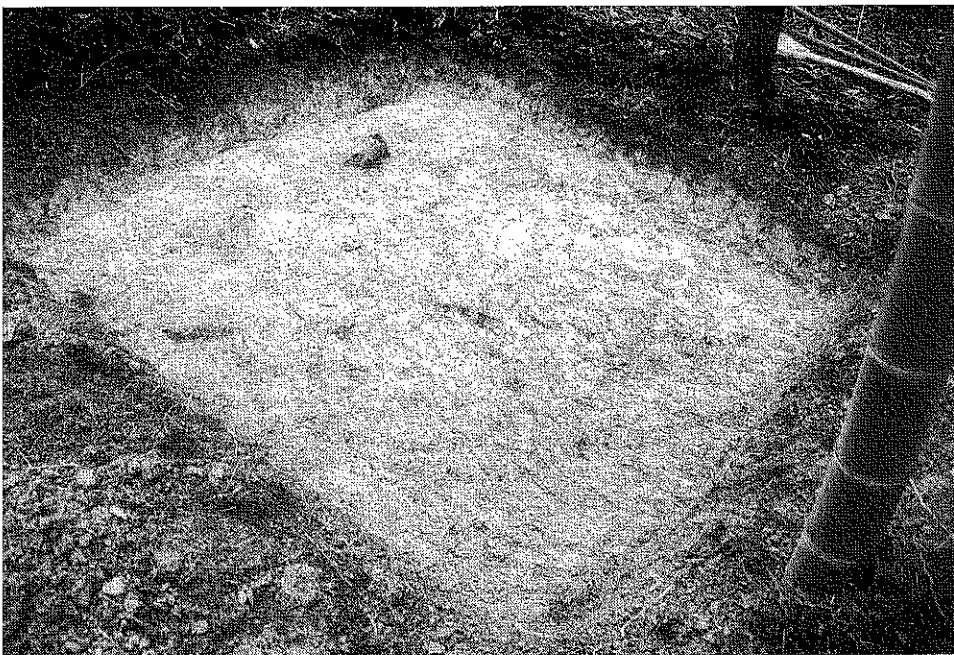




第23図 8 トレンチ全景
(NW→SE)



第24図 12 トレンチ全景
(S→N)



第25図 10 トレンチ全景
(S→N)

第26図 9 トレンチ全景
(NW→SE)

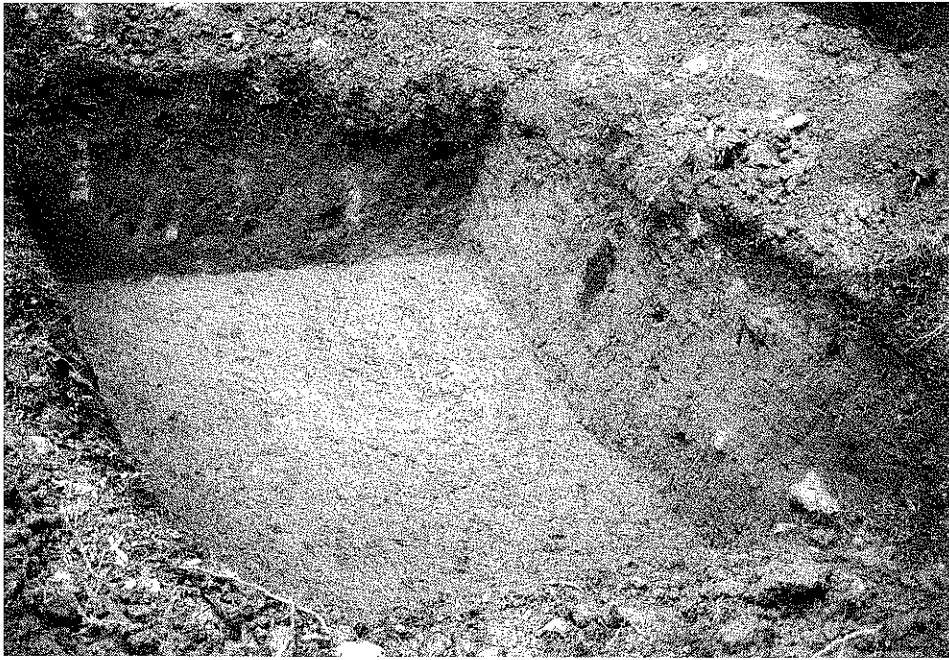


第27図 9 トレンチ白色土器
皿出土状況



第28図 9 トレンチ瓦質製品
出土状況

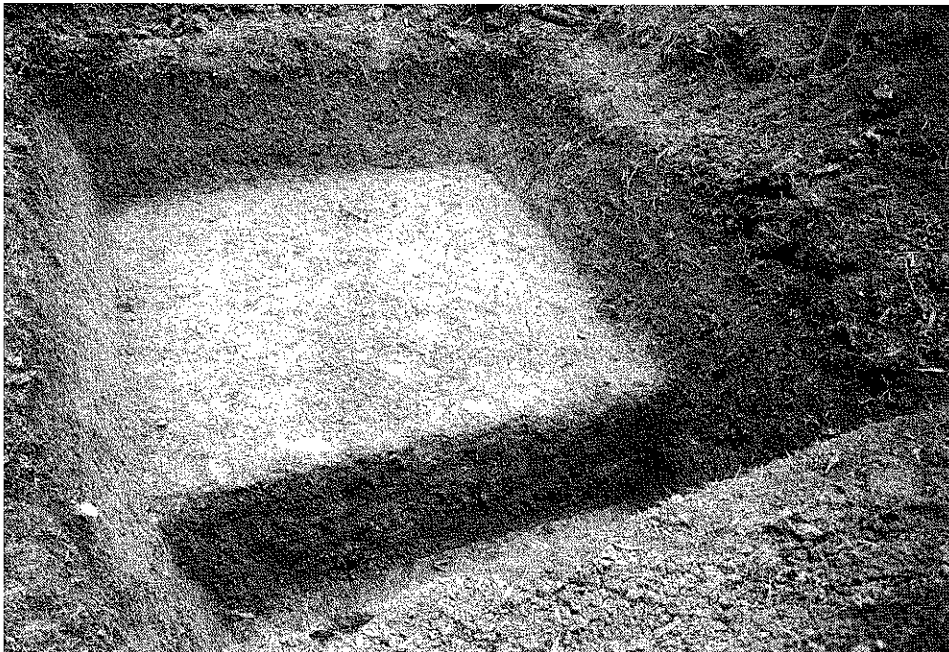




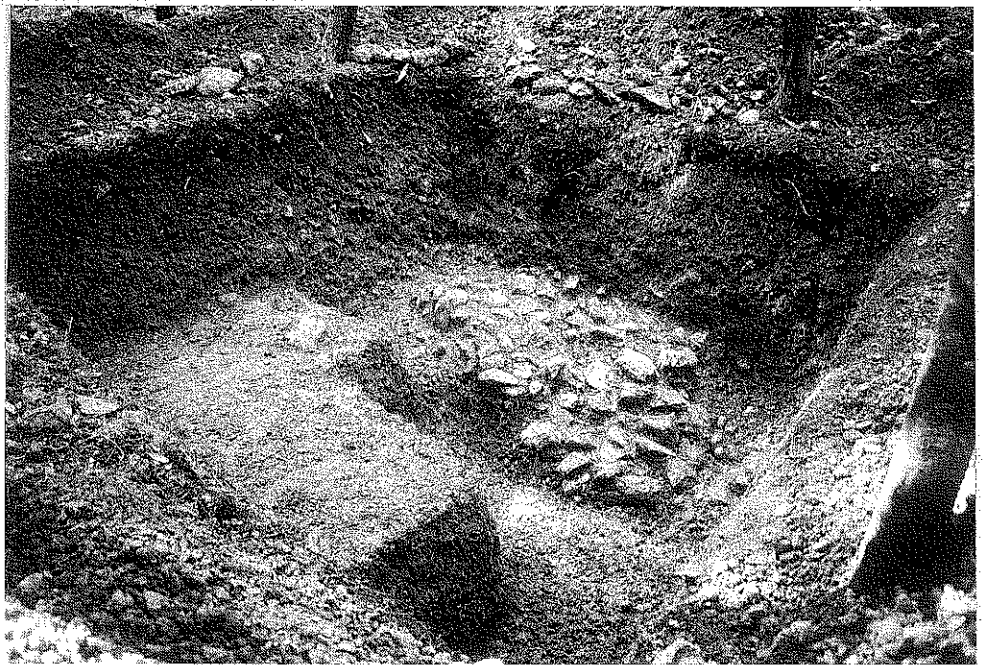
第29図 11トレンチ全景
(SW→NE)



第30図 13トレンチ全景
(SW→NE)



第31図 14トレンチ全景
(SW→NE)



第32図 15トレンチ全景
(E→W)



第33図 16トレンチ全景
(SW→NE)



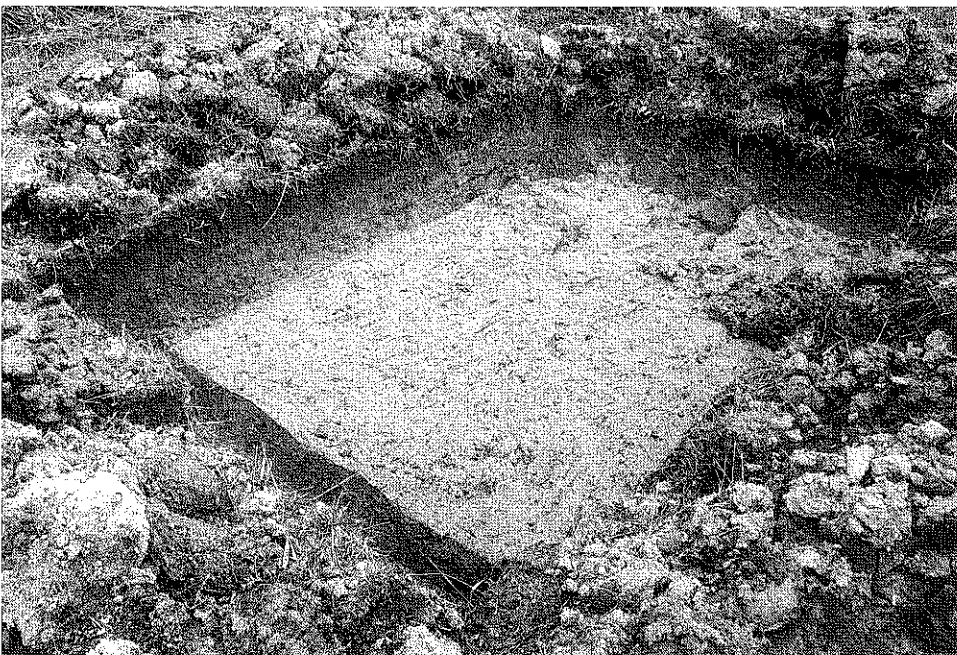
第34図 17トレンチ全景
(S→N)



第35図 第5調査区の風景
(SE→NW)



第36図 第5調査区西隣接の茶畑
(坊跡想定地) (NW→SE)



第37図 24トレンチ全景
(N→S)

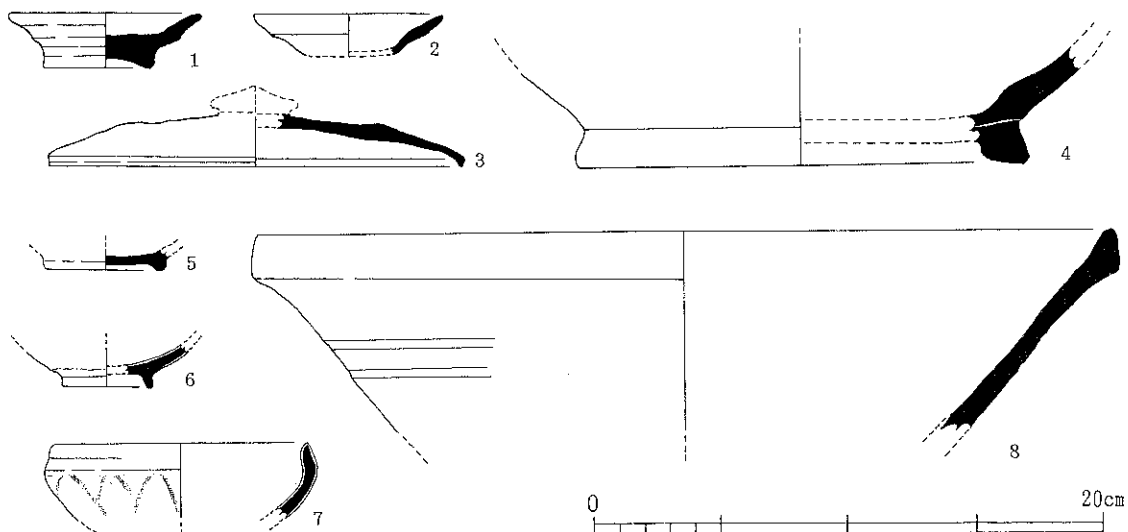
V. 出土遺物

今回の発掘調査で見つかった遺物量は、整理箱にして3箱である。ここでは主要な遺物（第38図）の概要を報告することとする。

1～3は第5調査区9トレンチ、4・6・7・8は第3調査区5トレンチ、5は第3調査区6トレンチからの出土である。

1は白色土器皿。口径7.8cm・器高2.1cm、回転ナデを全面に施す。張り付け高台を持つ。淡白褐色。13世紀中葉～末葉頃。2は土師器皿。口径7.3cm。口縁部を横ナデする。黄褐色。14世紀末葉～15世紀初頭。3は須恵器の杯Bの蓋。口径16.3cm、8世紀中葉頃。4は陶器の壺底部。張り付け高台で、内面に自然釉が付着する。5は瓦器碗である。底部内面に連結輪状の暗文を施す。12世紀前半頃。6は磁器である。灰白色の釉が全面にかかる。時期は江戸時代。7は青磁鎚連弁文碗である。口径10cmで、外面には幅広の二重連弁を彫り出す。口縁は内傾し、全面にオリーブ色の釉をかけている。8はいわゆる東播系の須恵器の鉢である。口径は21.4cm、口縁端部が直立する。12世紀末様～13世紀初頭。

次に図示できていないもので特筆されるものを記述しておく。第4調査区9トレンチから一辺38cm程の方形で厚7cmの瓦質製品（第28図）が出土した。糸切痕・縄叩き痕があり、片面のほぼ中央に径16cm程の剥離痕がみられる。塔の露盤か。同トレンチでは調査前に瓦質五輪塔の空輪部（宝珠）が採集された。第5調査区25トレンチでは、土師器・青磁等が出土した。土師器皿は、口径は8.2cmで形態から15世紀前半頃。青磁は劃花文碗である。釉は2次焼成のために表面の釉が変色、全体的に灰色状を呈している。



第38図 出土遺物実測図

VI. ま と め

以上、簡略ながら発掘調査の概要を述べてきた。ここでは、それらの成果を整理してまとめとしたい。

まず寺域北限からであるが、現風景の原形は近世期に成立したもので、その造成目的は、主に耕作地としてであったと理解される。近世以前では、中世期に第3調査区の平坦面が開削されたようである。グリッド調査の制約上、遺構性格の特定には至らなかったが、調査成果そして後述する南部での成果を考慮に入れて考えると、坊院の存在も十分あり得る。いずれにしてもこの北部域では、中世期にも小規模な開削が行われていたことが明らかとなった。

次は南限である。今回の調査地は白川谷の南端までを含む比較的大きな範囲を設定した。現地地形等からこれより南側へ広がることはないと理解できる。谷南端は小規模な棚田が数多く



第39図 金色院中心域と各調査区(北部・南部)位置関係

展開していた。どのトレンチも無遺構で少量の中世期遺物が出土した。細片が多く年代の詳細は困難だが、判別できるものから概ね室町期と判断できた。遺物の出土状況や小規模な平坦面等から北部同様に水田や茶畑等の耕作を主目的に造成されたと理解された。なおこのエリアでも坊院跡が想定される地点が2カ所ある。一つは第5調査区西隣接地の茶畑(第36区)である。茶畑で直接は窺えないが、周囲の調査で中世の遺物が多く出土している。現地地形からも可能性は高い。もう一つは谷南端の茶畑である。「白川十六坊」を考えれば可能性は十分ある。

このように中世期には白川谷全体に広く土地利用が行われいった。坊院も同時に谷全体に広がりを見せていったようである。

今回の発掘調査によって得られた成果は、寺域の理解、遺跡の総合的な意義等を捉える上で重要な成果を挙げる事ができた。今後はこれらの成果を叩き台に十分な検討を踏まえて遺跡の整理を図っていききたい。

付載. 第7次調査出土遺物

遺構については現在整理中であるが、出土遺物は一定の整理ができたためここで報告することとする。遺物との関係に必要な土層・遺構は概略で説明しておきたい。

A. 土層・遺構の概略

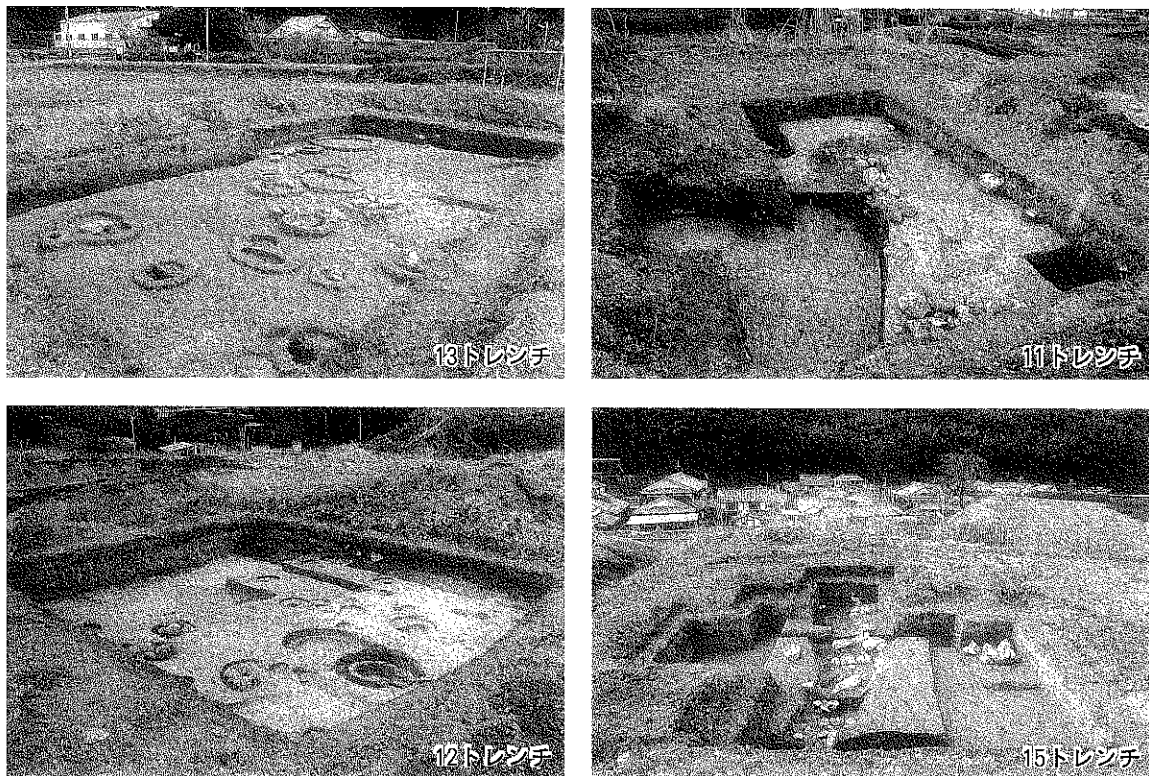
黒色土層（11トレンチ） 北側へ傾斜する旧地形を埋めたてて平坦地化した際の造成土の下層。造成後、礎石建物が建てられている。

土壌SK01（12トレンチ） トレンチ南側で見つかった直径1.0～1.1mのほぼ円形状の土壌。深さは30cm程で浅い。埋土は基本的には灰黄色砂質土の単一層で、礫を多く含む。

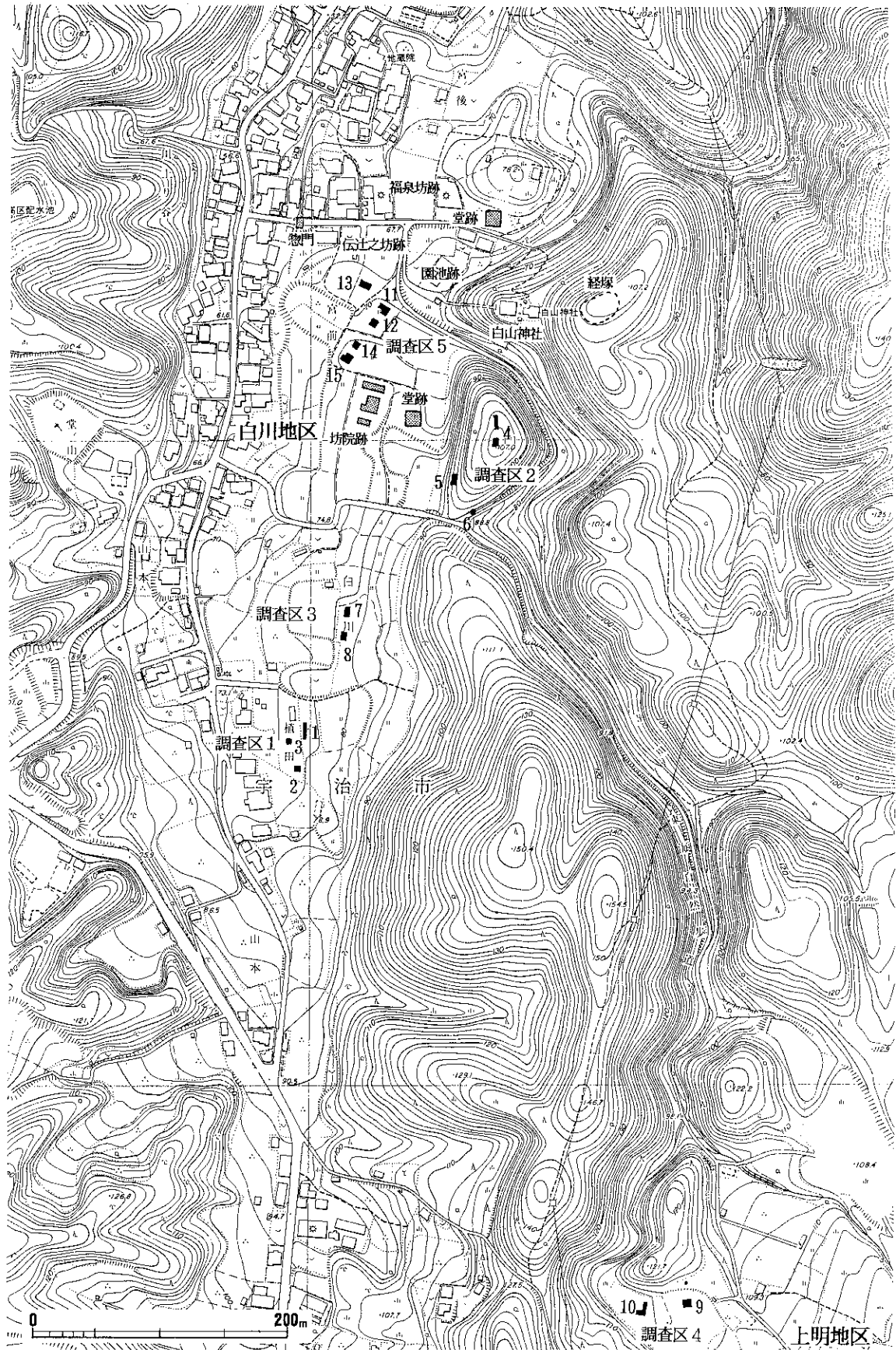
暗灰色土層（13トレンチ） トレンチの南東端で検出された層位。南東側に傾斜する地盤を覆うように広がる。整地土の可能性も考えられる。炭を比較的多く含む。

灰褐色粘質土層（15トレンチ） このトレンチで検出された主要な遺構が構築される際の造成土。遺物は上層付近で出土し、層位中包含というよりも上層との層位間で出土したとみた方が適切と考えられる。

黄褐色土層（15トレンチ） このトレンチで検出された主要な遺構が構築される際の造成土。



第40図 遺物出土主要トレンチ全景



第41図 第7次調査トレンチ配置図

B. 出土遺物

コンテナ箱にして約8箱分の遺物が出土している。以下、トレンチごとに述べていく。

第5調査区11トレンチ（第42図）

11トレンチからは今回最も多くの遺物が出土した。遺物の大半（2～26）は炭、灰が多く混じる黒色土層出土である。この中でもトレンチ南半礫集中部に特に多くの遺物が含まれていた。多くのものに二次焼成の痕が残る。この遺構の年代観は、出土遺物のほとんどが15世紀後半頃におさまる。12世紀後葉と13世紀後葉の遺物が若干含まれる。他の遺物は、1が黄褐色土（包含層）、27・28は淡黄褐色土（包含層）出土である。

土師器皿

1から20は土師器皿である。これらの土師器皿は法量から小型、中型、大型の皿に分けられる。（以下小皿・中皿・大皿）その出土比率は、仮に図化したものの数で計測してみると、概ね大：中：小＝4：2：9の割合となる。小皿が多く見受けられた。以下、小皿からみていく。

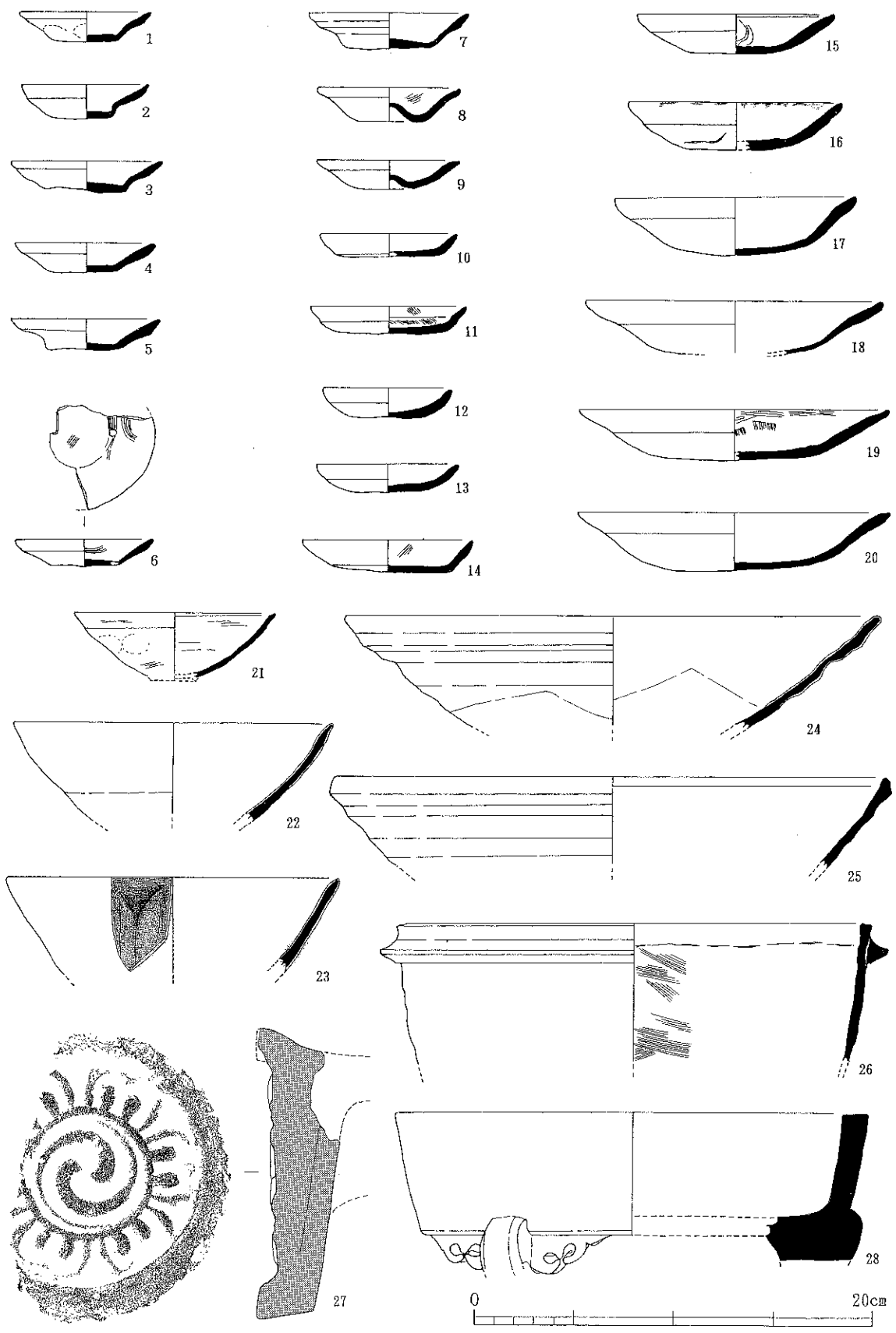
小皿（1～14）は口径が7.5cm前後を測る。これらは形態の特徴から大きく5タイプに分かれる。（a・b・c・d・e）

aタイプ（1～7）は今回最も多く見られた。見込みを一方向にナデたのち、内面体部から口縁部にかけて右回りに強く横ナデするため、底面周辺に凹凸が残る。平底。1は口径6.6cm、器高1.5cm。赤褐色を呈する。2は口径6.2cm、器高1.7cm。胎土は砂粒を少量含み、淡黄褐色を呈する。3の底部外面には煤が付着している。口径7.7cm、器高1.5cm。淡黄褐色を呈する。4は口径7.2cm、器高1.5cm。胎土は砂粒を少量含み、淡赤褐色を呈する。5は口径7.6cm、器高1.5cm。胎土は砂粒を含み、淡橙褐色を呈する。6には焼成後、底部2か所に外面から径3.0mmの穴が穿たれている。今回同様のものがもう一点出土している。口径7.0cm、器高1.3cm。胎土は直径0.5mm以下の砂粒を少量含み、灰褐色を呈する。7は口径8.2cm、器高1.7cm。胎土は砂粒を少量含み、淡赤褐色を呈する。これらはいずれも15世紀後半頃のものである。

bタイプ（8・9）はへそ皿である。いずれも端部がわずかに上方につまみ上げられたような口縁部をもつ。8は口径7.4cm、器高1.8cm。胎土は砂粒を含み、淡黄白色を呈する。9は口径7.4cm、器高1.5cm。胎土は砂粒を少量含み、淡赤褐色を呈する。15世紀後半頃。

cタイプ（10・11）は口縁部の立ち上がりの小さい浅みの皿である。口縁部に一段ナデを強めに施す。体部内面は底面端から口縁端部に向かって刷毛目調整した後、口縁内面にヨコナデを施す。平底。10は口径7.0cm、器高1.1cm。胎土は砂粒を多く含み、淡褐色を呈する。11は口縁内面と内底面の境に刷毛目がはっきりと認められる。底部外面には指頭圧痕が残る。口径8.0cm、器高1.4cm。胎土は雲母などの砂粒を少量含み、淡橙褐色を呈する。13世紀末頃。

dタイプ（12・13）は口縁部一段ナデで端部を弱く面取りする。いずれも口径7.0cm程、



第42図 第5調査区11トレンチ出土遺物

器高1.5cm。胎土には雲母などの砂粒を含み、淡橙褐色を呈する。13世紀後半頃。

eタイプ(14)は口縁部に二段ナデを施すものである。このタイプは今回の出土遺物の中ではこれ一点のみである。内面は底面に一方向ナデを施し、「の」の字状にナデ上げる。平底。口径8.6cm、器高1.6cm。胎土には雲母などの砂粒を含み、淡褐色を呈する。12世紀後葉頃か。

中皿(15~17)は口径10.0~13.0cmを測る。15は内底面周辺がナデによってごく浅くくぼむ。口縁部一段ナデ、口縁部内面端部はヨコナデによってくぼんでいる。内面には「2」の字状ナデ上げがくっきりと認められる。口径10.0cm、器高2.0cm。橙褐色を呈する。16は口縁部一段ナデ、口縁部内面ヨコナデ。口径10.6cm、器高3.4cm。淡橙褐色を呈する。口縁部に煤が付着する。15・16はいずれも器壁が5.0mm前後とやや厚手である。15世紀後半。17は口縁部内面端部がヨコナデによってごく浅くくぼむ。底部全体はやや丸みをおびる。口径が12.3cm、器高3.0cmと他の2点に比べやや大きめである。15世紀前葉。

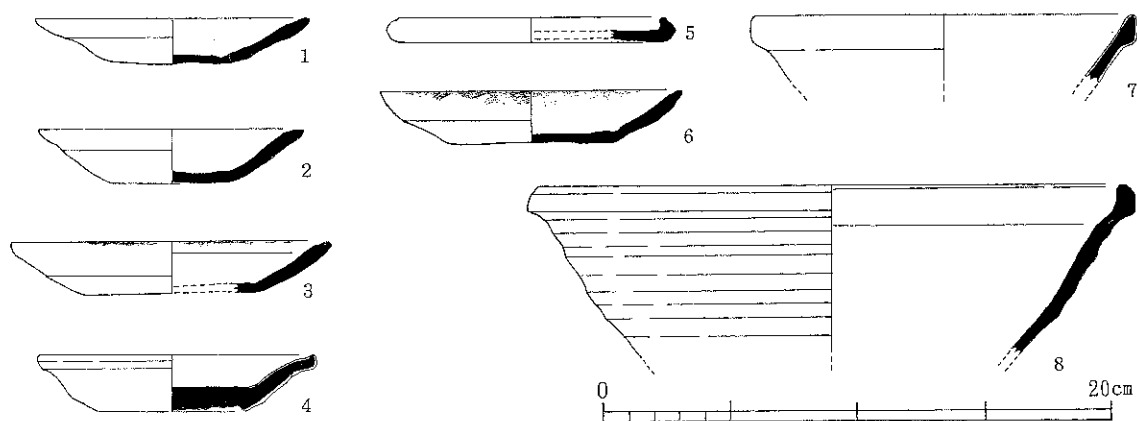
大皿(18~20)は口径14.2~16.0cmを測る。いずれも外反する口縁部にヨコナデを施す。内底面は一定方向にナデを施す。体部内面には不定方向へのハケの痕跡が認められる。平底。18は口径15.0cm。19は口径15.6cm、器高2.8cm。20は口径15.8cm、器高3.0cm。いずれも淡褐色を呈する。これらは黒色土層中の土器溜まりの中でも西側の土器群に多くみられた。小皿1~9や中皿15~17と同じく15世紀後半のものである。

瓦質土器 21は大和型の瓦器椀である。体部内外面のミガキは不明瞭だが、密ではない。口径10.2cm。器壁は3mm程と薄い。淡灰色を呈する。13世紀後半頃。26は瓦質の羽釜である。口縁部内外面はヨコナデ、内面は全面にナデを施す。口径20.3cm。胎土には砂粒を少量含み、褐色を呈する。表面には煤が付着する。13世紀末頃。28は瓦質土器火鉢である。形態はほぼ垂直に立ち上がる体部をもつ。底部には粘土張り付けの獣足が1つ残っている。内外面を丁寧なナデ、外面にはミガキを施す。口径24.0cm、体部高6.2cm。胎土は砂粒を若干含み、黒色を呈する。27、28は淡黄褐色土包含層出土。

輸入陶磁器 22は白磁椀である。口径16.1cm。胎土は直径1.0mmまでの砂粒を少量含む。胎土は浅黄色。体部上半に、淡黄緑色の釉を薄くかける。全面に二次焼成の痕跡を残す。黒色土層中の土器溜まり出土。12世紀後半頃か。23は龍泉窯系鎗蓮弁文青磁椀である。口径16.8cm。胎土は若干の砂粒を含む。灰白色の胎土に黄味がかった緑色の釉をかける。13世紀頃。

国産陶器 24は瀬戸の灰釉陶器深皿である。体部内外面にヘラ削りを施す。口径は27.2cm程。胎土は直径1.0mm以下の砂粒を含む。暗黄白色の胎土に暗黄緑色の釉を、体部下半を残してかける。焼成は堅緻。14世紀末頃か。

須恵器 25は須恵器片口鉢である。形態は口縁端部に明瞭な拡張はみられない。口径28.0



第43図 第5調査区12トレンチ出土遺物

cmの小型のものである。胎上には砂粒を多く含み、褐色がかった白灰色を呈する。14世紀後半頃か。

瓦 27は複弁六弁蓮華文軒丸瓦である。中房に二巴文を配する。瓦当直径15cm程。胎上は直径2.0mm程度の砂粒を多く含む。二次焼成による変色のため淡灰褐色を呈する。3トレンチ出土のものと同じく、河内向山瓦窯産で、範傷の状況から平等院の同範瓦に先行する。平安時代後期。

第5調査区12トレンチ（第43図）

土壌SK01

土師皿 1～3は土師器皿である。これらはいずれも口縁部はヨコナデ、内底面は一方向ナデを施す。口縁部はほとんど外反しない。内底面端は少しくぼみ浅い圈線状となる。1は口径10.8cm、器高1.9cm。胎土は砂粒を少量含み、淡い橙褐色を呈する。2は口径10.4cm、器高2.1cm。胎土には砂粒を含み淡褐色を呈する。3は口径12.4cm、器高2.1cm。胎土には砂粒を含み、淡橙褐色を呈する。口縁には煤が付着する。これらはいずれも16世紀末頃のものである。

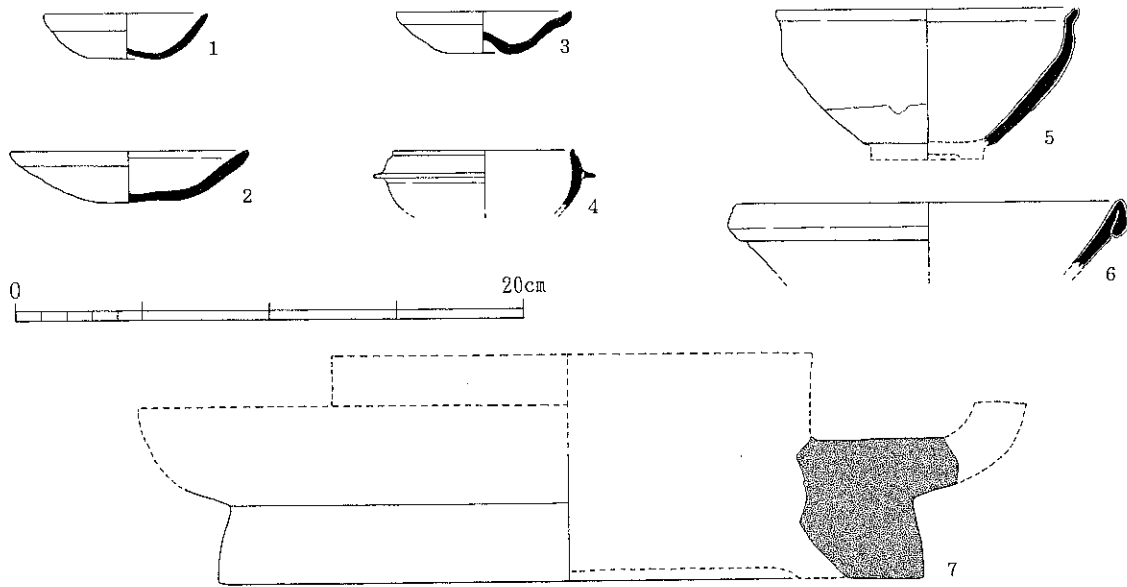
国産陶器 4は瀬戸の折縁皿である。口縁部が外側に折れる形態をもつ。口径10.8cm、器高2.3cm、底径5.9cm。淡黄色の胎土に黄緑色の釉をかける。見込み中央部には化粧がけのみし、釉を掻き取る。高台は露台で、輪トチンの痕跡を残す。16世紀後半頃。

暗灰色土層（包含層）

輸入陶磁器 7は白磁碗である。玉縁状の口縁部をもつ。口径13.2cm。黄白色の胎土に透明な釉をかける。11世紀中葉から12世紀初頭頃か。

表土層（耕作土）

土師器 5・6は土師器皿である。5は体部内面と口縁部にヨコナデを施す。体部外面の底部と口縁部の境目には強いナデ痕が残る。口径12.0cm、器高1.9cm。淡橙褐色を呈する。口縁部には煤が付着する。6は口縁部を上方に折り曲げ、ヨコナデを施す。いわゆる「コー



第44図 第5調査区13トレンチ出土遺物

スター型」である。底部は偏平である。口径10.4cm程、器高1.0cm。胎土には砂粒を含み、淡褐色を呈する。13世紀末頃か。

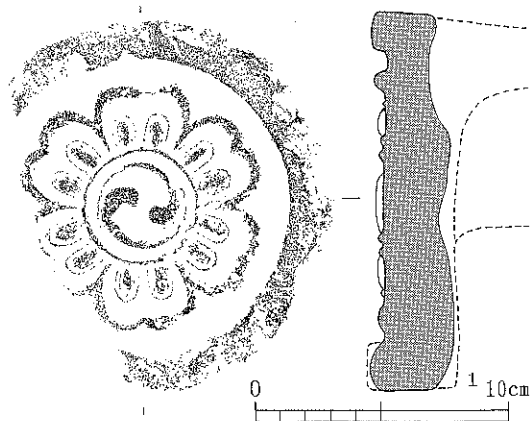
須恵器 8は須恵器片口鉢である。形態は口縁端部が肥厚するが明瞭な拡張はみられない。口径17.4cm。胎土には直径1.0cmの砂礫や0.1cm程の砂粒を含み、淡白灰色を呈する。14世紀後半頃。

第5調査区13トレンチ (第44・45図)

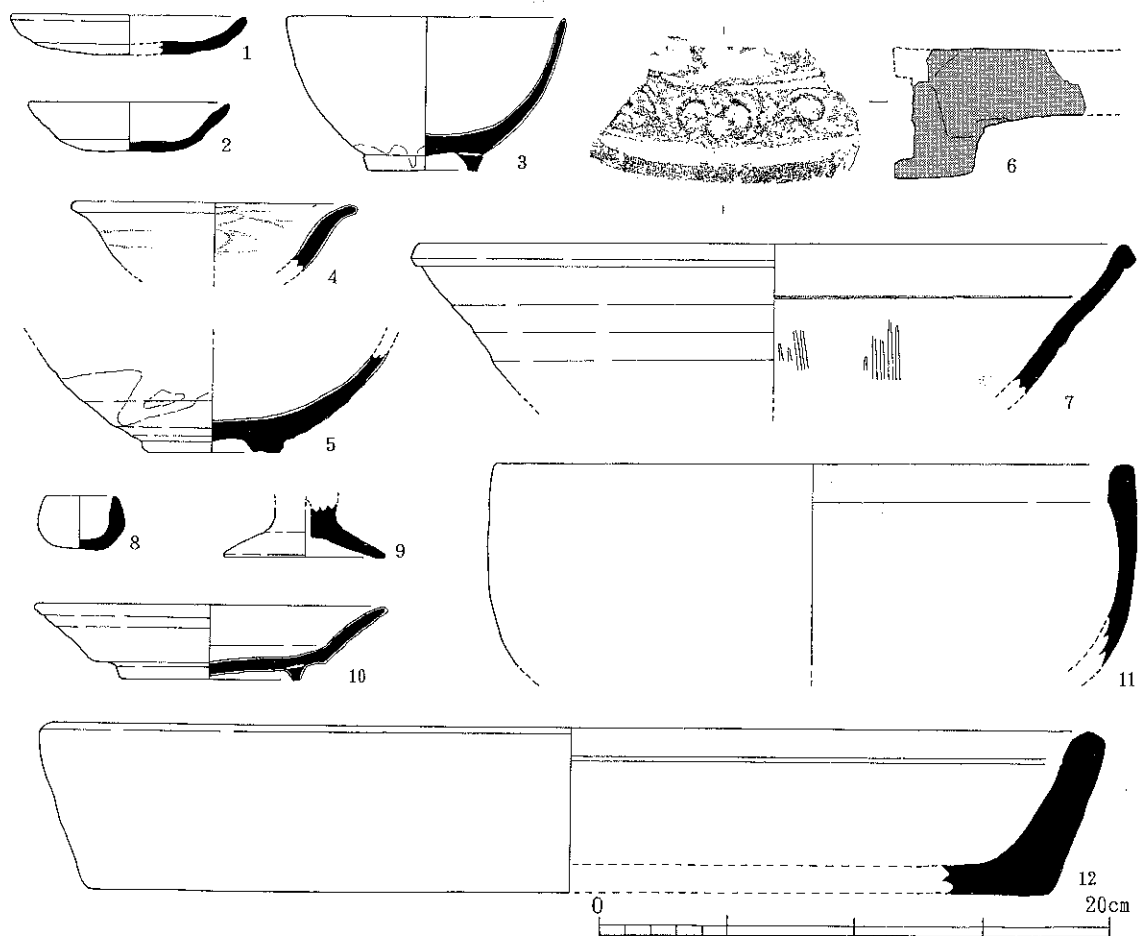
暗灰色土層

土師器 1～3は土師器皿である。1は表面を平滑に仕上げている。口径3.6cm、器高1.8cm。胎土には直径2.0mmまでの砂粒を含み、淡褐色を呈する。焼成はやや甘い。2は体部内面と口縁部にヨコナデを施す。口径9.4cm、器高2.0cm。胎土には砂粒を含み、淡赤褐色を呈する。口縁部に煤が付着する。16世紀中葉。3はへそ皿である。内面全体と口縁部にヨコナデを施す。口径6.8cm、器高は1.7cmとやや低い。胎土は精良で淡褐色を呈する。15世紀末頃。4は土師質のミニチュア土釜である。内外面にナデを施し、丁寧に仕上げる。口径7.2cm。胎土は精良で淡褐色を呈する。

国産陶器 5は美濃の天目茶碗である。口縁の端部がS字状に強く屈曲する。口径12.0cm。胎土は精良で黒褐色を呈する。体部上半の内外面に鉄釉を施釉し、下半の露胎部に化粧がけを



第45図 第5調査区13トレンチ出土軒丸瓦



第46図 第5調査区15トレンチ出土遺物

施す。16世紀中頃か。

柱穴 1

輸入陶磁器 6は白磁碗である。玉縁状の口縁部をもつ。口径15.0cm。灰白色の胎土に緑白色の釉をかける。11世紀中頃か。

表土層（耕作土）

石製品 7は茶臼の下臼の受け皿と台部である。表面全体に漆を塗った痕跡が一部残る。台部の底部径は28.0cm。

瓦 8は複弁六弁蓮華文軒丸瓦である。中房に二巴文を配する。河内向山瓦窯産。平等院出土資料に同文、同範瓦がある。瓦当直径15.0cm。胎土は直径5.0mmまでの砂粒を多く含む。二次焼成による変色のため、白っぽい淡褐灰色を呈する。平安時代後期。

第5調査区15トレンチ（第46図）

灰褐色粘質土層

土師器 1・2は土師器皿である。1は口縁部に一段ナデを施し、端部を弱く面取りする。口径9.2cm、器高1.6cm。胎土には砂粒を少量含み、淡褐色を呈する。13世紀後半頃。2は大

きく外反する口縁部をもつ。口径8.0cm、器高2.0cm。胎土は直径1.0mm以下の砂粒を多く含み、橙褐色を呈する。14世紀後半頃。

国産磁器 3は磁器碗。高台部分は削り出し。口径11.0cm、器高6.1cm、底部径4.4cm。胎土は精良で、乳白色を呈する。口縁部から外面体部に高台を除き鉄釉を、内面に透明釉をかける。

黄褐色土層

輸入陶磁器 4は龍泉窯系の青磁小碗である。口縁端部が極端に外反する。内面には画花文を描く。口径11.3cm。灰白色の胎土に黄味がかかった緑色の釉を、口縁端部にむかって薄くなるようにかける。

国産陶器 5は体部内外面にヘラ削りを施し、高台は削り出しによる。高台径5.6cm。胎土は直径0.5mm程の砂粒をごく少量含む。褐色の胎土に灰白色の釉をごく薄く、体部下半を除いてかけている。

SD01

瓦 6は均整唐草文の軒平瓦の一部である。凹面に細かい布目圧痕が残る。顎凸面はナデ、裏面はヘラケズリをいずれも横方向に、凸面はこれと垂直の方向にナデを施す。瓦当幅5.0cm、厚さ2.5cm程。胎土は直径2.0mm程の砂粒を含み、青灰色を呈する。

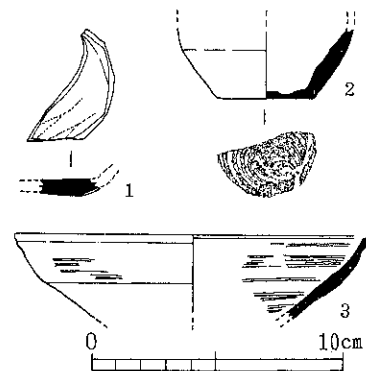
国産陶器 7はすり鉢である。5条1単位のすり目をもつ。口縁部は玉縁状である。体部内外面はヘラケズリを施す。体部内面の上方に一条の沈線をもつ。口径29.0cm。胎土は砂粒と直径3.0mm程度の石粒を多く含み、赤褐色を呈する。外面には薄く煤が付着する。信楽焼か。16世紀中葉。

表土層（耕作土）

土師質土器 8は土製の小壺である。口縁部内面はヨコナデ、内底面にはナデを施す。口径2.8cm、器高2.1cm。胎土には砂粒を多く含み、淡白橙色を呈する。「つぼつぼ」と呼ばれる。江戸時代の史料に伏見稻荷の初午祭りで売られたとみえるものである。（『天和長久四季あそび』など）

輸入陶磁器 10は青磁皿。形態は体部下下部で外側に屈曲するものである。高台は輪状高台。口径13.8cm、器高3.0cm。胎土は精良で灰色を呈する。灰色がかかった緑色の釉を、底部外面を除き全面に薄く施す。

瓦質土器 12は瓦質土器浅鉢である。内面口縁近くに一条の沈線をもつ。口径41.0cm、器高6.5cm。胎土には直径1.0mm程の砂粒を多く含み、灰色を呈する。



第47図 第8調査区7・8トレンチ
第4調査区9トレンチ出土遺物

黄褐色土層（床土）

瓦質土器 9は瓦質土器である。中心に直径5.0mmの穴を貫通させている。底部径6.4cm。胎土は砂粒を含み、白灰色を呈する。六器の一つの灯火具の脚部と考えられる。11は瓦質土器の深鉢である。内面はヘラ削りを施し、外面は非常に滑らかに仕上げる。口径25.0cm。胎土は褐灰色、表面は濃い黒褐色を呈する。

第3調査区7トレンチ（第47図）

このトレンチでは土師器皿片、肥前磁器片、すり鉢片、瓦質土器釜片、瓦などが出土した。コンテナにして1箱分程であるが、ほとんどが細片のため図化できたものは10数点と極めて少ない。これらの遺物は中世から近世までのものである。ここではそのうち代表的な一点のみ紹介する。3は大和型瓦器椀片である。口縁部内面に一条の沈線がめぐる。体部のヘラミガキは、外面には上位3分の一ほどの幅で水平方向に粗く施される。内面には、隙間の大きい圏線状のミガキが施される。口径14.0cm。胎土には微量の砂粒を含む。13世紀初頭頃。

第3調査区8トレンチ（第47図）

1は同安窯系青磁皿の底部片である。内面には櫛状施文具で文様を描く。胎土は淡黄灰色で淡黄緑色の釉を薄くかける。灰褐色粘質土層出土。

第4調査区9トレンチ（第47図）

2は須恵器の瓶子である。底部に回転糸切りの痕跡を残す。底部径4.0cm。胎土は直径5.0mmまでの石英などの砂粒を僅かに含み淡青灰色を呈する。平安時代初頭頃。この他図化できなかったが、奈良時代のものと思われる須恵器片や土師器片が出土している。

抄 録

ふりがな	しらかわこんじきいんあとはくつちょうさがいほう							
書名	白川金色院跡発掘調査概報							
副書名	平成12年度							
巻次								
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報							
シリーズ番号	第50集							
編著者名	浜中邦弘・小谷紗代・西田倫子							
編集機関	宇治市歴史資料館							
所在地	〒611-0023 京都府宇治市折居台1-1							
発行年月日	2001年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	期間	面積	原因
しらかわこんじきいんあとの 白川金色院跡	宇治市白川植田・鍋倉山・川下・川上り谷・宮の後	26204	10	34° 52' 28"	135° 48' 55"	001107 ～ 010316	300 m ²	範囲確認
収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
白川金色院跡	寺跡	平安時代 ～ 江戸時代		瓦・陶器・須恵器・陶磁器・土師器・瓦質土器				

(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第50集)

白川金色院跡発掘調査概報

— 平成12年度 —

発行日 平成13年3月31日

発行者 宇治市教育委員会

編集 宇治市歴史資料館

〒611-0023 宇治市折居台1-1

印刷 新進堂印刷所

